

集ばかりであった。昭和 19 年 4 月以来今日まで評議員会の一員として関係してきたが、この間昭和 26 年 5 月より 2 カ年間萩原理事長のもとで副理事長を勤め、さらに昭和 30 年 5 月から 2 カ年間理事長として直接学会の業務に関係した。しかし関係したといっても実際の業務は若い理事の方々が献身的に働いて下さったので、私など添えものに過ぎなかった。昭和 24 年萩原理事長時代に欧文報告第 1 巻を発行されて今日まで巻を重ねているが、ここにおいて日本天文学会は名実とも天文学の代表的学会となったことは誠に悦びに堪えぬところである。

最後に、私の関係してきた恒星天文学についてふれておこう。世界における恒星天文学発達の歴史については、本誌第 47 巻第 12 号(昭和 29 年 12 月号)に掲載されている拙文【恒星天文学の足跡をたずねる】を参照して戴くことにして、日本における恒星天文学の先駆者は故平山信先生であって、先生は 1920 年頃から恒星天文学関係の内容を講義の一部にとりいれられ、また恒星天文学に関する論文を数篇発表された。私が恒星天文

学に興味をもったのも平山信先生の感化とその指導を受けたことによる。その後、清水疆氏(現京大教授)も恒星天文学に興味をもち研究を続けられた。今から 10 年ほど前から、若い人たちの中にも恒星天文学に関心をもつ方が多数現われたので、昭和 31 年に恒星天文学研究グループ(略称 SAM)を結成し、毎月 1~2 回会合を開いて研究問題を討議してきた。今日では、SAM のメンバーとして東北大学、東京大学、東京天文台、東京学芸大学、水路部、国土地理院、岐阜医科大学、京都大学、仏教大学、大阪学芸大学、和歌山大学、広島大学などの同好の士がこれに加わり、総数 30 名を超える状態となった。地理的にメンバーが日本中の各地に分散しているの、平常は東京および京都を中心としてそれぞれ毎月 1~2 回研究会をもつが、昭和 36 年夏と昭和 37 年夏には新潟県池の平で全体としての研究会をもった。こうして若い人たちの間に恒星天文学の研究熱が高まり、着々成果を挙げていることは私にとって誠に嬉しいことである。

会員諸氏の太陽黒点観測報告 (1962 VII~XII)

観測者	観測地	使用機械・方法	報告日数及び相対数											
			7 月		8 月		9 月		10 月		11 月		12 月	
			日数	相対数	日数	相対数	日数	相対数	日数	相対数	日数	相対数	日数	相対数
川口市立・児童文化センター 橋 伸太郎	埼玉・川口市	150 RE×56 P	7	21	16	27	12	76	8	54	—	—	8	41
			19	19	26	18	23	54	18	44	18	25	—	—
墨田川高・天文部	東京・墨田区	250 L P	8	8	15	5	—	—	10	31	10	15	13	20
大森高・“星を観る会”	東京・大田区	75 R { ×48 V ×48 P }	12	22	15	26	10	51	12	52	8	33	17	27
立川高・天文気象部	東京・立川市	100RE { ×60 P ×120 P }	17	36	26	32	21	79	12	56	16	26	19	35
慶応義塾高・地学研究会	神奈川・横浜市	不 明	—	—	4	41	5	37	4	25	2	25	—	—
日大高・物理部天文班	神奈川・横浜市	60 R { ×36 V ×100 P }	11	16	14	18	15	58	14	57	12	31	25	27
望 月 脱 育	埼玉・越谷市	75 RE×50 { V P }	19	27	24	26	25	64	21	51	22	27	28	31
武 石 信 之	東京・久留米町	50R×60×88 60R×50×100 P	14	24	21	29	21	51	14	51	14	32	25	29
清陵高・天文気象部	長野・諏訪市	100 R×60 P	15	24	20	19	21	45	14	47	14	18	24	20
藤 森 賢 一	長野・諏訪市	100 L { ×56 V 60 R }	16	22	28	24	19	53	15	43	15	29	21	28
飯 田 高・天文班	長野・飯田市	150 RE { ×56 V ×25 P }	—	—	—	—	16	68	18	52	11	12	—	—
三五教・月光天文台	静岡・沼津市	不 明	28	16	31	18	29	52	—	—	—	—	—	—
山 田 和	富山・礪波市	60 RE { ×36 V ×72 P }	17	22	26	30	10	78	7	87	1	22	1	16
出 口 修 至	愛知・知多町	150 L { ×21 V ×102 P }	9	24	16	20	17	53	10	43	11	29	15	32
鈴 木 美 好	三重・鈴鹿市	80 RE { ×40 V ×70 P }	3	17	22	26	9	70	11	54	12	42	20	39
橋本高・天文気象部	和歌山・橋本市	51 R P	9	14	17	20	18	44	11	38	10	27	12	—
藤 村 俊 夫	京都・左京区	不 明	11	15	13	22	15	35	19	38	12	24	15	17
水 野 晶	京都・宇治市	60 L×50 V	8	16	—	—	10	64	—	—	—	—	—	—
柏原高・天文班	兵庫・氷上郡	100RE { ×60 P ×120 P }	21	28	21	29	18	63	16	49	12	25	13	29
姫路高・天文班	兵庫・姫路市	50 R×60 P	10	14	25	13	10	36	13	38	13	20	15	21
玉 川 中 学 校	長野・茅野市	60 E×48 V	15	16	20	17	17	40	16	47	14	22	13	13

・使用器械方法の欄の略符は最初の数字が口径(耗), 以下 R (屈折), L (反射), E (赤道儀), A (経緯台), × (倍率), V (直視), P (投影) を示す。報告日数および相対数の欄で“—”は報告のなかったものを示し、相対数は(10₀+f)の月平均値である。

附 東京天文台の日報黒点数 ($g \cdot f$) (1962 VII~XII)

月	7	8	9	10	11	12	月	7	8	9	10	11	12	月	7	8	9	10	11	12
1	4.26	0.0	2.19	4.30	4.7	2.14	12	1.4	2.4	4.20	3.41	3.8	1.2	23	2.7	2.17	3.11	3.11	—	1.11
2	—	0.0	—	3.21	2.12	—	13	2.16	1.8	5.25	—	3.26	1.3	24	2.9	3.10	2.14	4.22	—	4.9
3	3.21	0.0	3.51	1.21	—	2.15	14	2.11	2.19	5.40	—	—	1.3	25	1.6	1.1	3.31	3.29	3.10	3.6
4	—	1.1	—	—	1.6	4.17	15	2.6	2.36	5.37	4.48	—	1.3	26	2.6	—	4.34	3.23	—	2.2
5	—	1.1	6.42	—	1.2	—	16	1.5	2.26	3.37	4.34	—	1.3	27	1.3	0.0	4.26	—	1.2	1.1
6	—	1.4	—	3.4	1.2	5.17	17	4.10	3.29	1.33	3.36	4.49	1.10	28	—	0.0	3.34	—	—	0.0
7	—	1.1	—	3.7	2.3	5.14	18	—	3.31	1.43	2.31	—	3.18	29	1.4	1.1	3.17	—	1.3	0.0
8	—	1.3	—	2.8	2.7	3.7	19	2.3	—	1.24	3.23	3.27	2.31	30	1.2	2.5	5.24	—	1.4	0.0
9	—	0.0	4.31	4.14	1.2	3.12	20	—	—	1.17	3.14	—	4.32	31	0.0	2.12	*	2.8	*	—
10	—	0.0	2.18	4.25	—	4.12	21	3.6	2.21	2.9	2.9	—	2.23							
11	1.6	0.0	4.15	—	1.2	1.2	22	3.10	3.20	—	—	—	2.19	(月平均値)	19.1	16.8	45.5	36.9	25.5	22.7

表の数値は黒点群の数 (g) と黒点総数 (f) を示す。例えば、5.25 は $g=5, f=25$ の意味である。月平均値は黒点相対数 ($\tau=k(10g+f)$) の平均値で、 k の値は 0.72 である。

観測者諸氏の常数 k の値 (1962 年度)

観測者	k の値	採用の月数	1カ年、報告日数	観測者	k の値	採用の月数	1カ年、報告日数
川口市立・文化児童センター	0.64	10	111	飯田高・天文班	0.82	9	108
板橋伸太郎	0.86	11	229	三五教・月光天文台	0.91	9	251
墨田川高・天文部	1.93	10	122	山田和	0.82	7	110
大森高・“星を観る会”	0.70	11	166	出口修至	0.89	12	163
立川高・天文気象部	0.58	12	233	鈴木美好	0.74	12	148
慶応義塾高・地学研究会	0.93	8	65	橋本高・天文気象部	1.03	11	140
日大高・物理部・天文班	0.85	11	174	藤村俊夫	1.11	8	107
望月悦育	0.78	12	265	水野晶	0.72	6	50
武石信之	0.69	12	218	柏原高・天文班	0.82	11	181
清陵高・天文気象部	1.02	12	226	姫路高・天文班	1.17	12	182
藤森賢一	0.89	12	201	玉川中学校	1.12	6	95

◎ 常数 k の値についての詳細は、天文月報、(第 55 巻) (第 4 号) を参照のこと。

◎ 今後整理の都合上、報告の掲載は年一回、 k の値と共に、天文月報に掲載する。(88. 1. 20. 締切)

(東京天文台太陽物理部)

1943a 彗星の発見事情

池谷 薫

僕が新彗星の搜索を始めたのは 1961 年の 8 月ごろからでした。この時は 10 cm 反射を使用していたがまもなく 15 cm 反射に換えました。その後ずっとこの 15 cm 鏡を使用していたが、搜索回数、時間、等を日記のかたすみに付記したのは、1962 年 1 月 2 日からでした。

早期発見を思いたち、62 年 8 月ごろにフォークタイプ赤道儀として一応完成した 21 cm 反射を改造して 12 月中旬ごろ軽量の経緯台に作り変えました。口径は 21 cm 倍率は約 35× で視野は 1 度位でした。主鏡は自分で磨き、F は 6.7 でした。アイピースはレンズだけ購入して自分で組合せたものでした。

1963 年 1 月 3 日、朝 4 時すこし前に起きたし東の空を捜した後、南東の空も捜すことになりました。

地平線に沿って段々高度を上げながら見てゆく途中、うみへび座 π 星付近で非常に淡くかすかな天体が視野を

通過したように思いました。急いで元にもどしてみると暗いかすかな星雲様の天体がかろうじて見えていました。

早速中野星図を調べて見るとこの辺の星野は No. 26 に当たっていました。うみへび座 π 星の西の恒星の北西の位置で淡い天体は 21 cm の視野の中央に見えていました。星図には何も記してないのでスケッチをした。時刻は 5 時 05 分だった。光度は見た感じではカニ星雲等よりずっと暗く 12 等級位に思い直径は約 3 分でした。

この時の搜索は 109 回 135 時間 30 分でした。

翌日 3 時に起き π 星の登るのを待ちました。3 時 25 分ごろ π 星が見えたので、昨日の位置に合せ 21 cm 鏡をのぞきました。淡い天体は南方に 20 分位移動していました。数回スケッチとくらべたが確かに動いていました。前日と同じように淡く小さく見えていました。

昭和 38 年 2 月 20 日
印刷発行
定価 50 円(送料 6 円)
地方売価 53 円

編集兼発行人 東京都三鷹市東京天文台内
印刷所 東京都港区芝南佐久間町一ノ五三
発行所 東京都三鷹市東京天文台内

広瀬 秀 雄
笠井出版印刷社
社団法人 日本天文学会
振替口座東京 13595